

---

# 望まぬ再会、望んでいた再会

影法師

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

望まぬ再会、望んでいた再会

### 【Nコード】

N0624U

### 【作者名】

影法師

### 【あらすじ】

2年前に別れた男女。真面目だが淡白な男は怒りのままに恋愛を捨て、日々を流されるように生きていた。穏やかだが弱かった女は失意のまま男と離れ、自分を見失ったまま生きていた。

しかし2人は何故か再会する。男はそれを望まず、女はそれを望んでいた。自分の心を偽り冷えたまま生きる男、自分の過ちに苦しみ、償いを求める女。再会は二人をどう変えて行くのか……

## 第1話（前書き）

初投稿です。一応自分の過去の恋愛がモデルですが、お見苦しい所が多々あります。

その辺生暖かく見守ってくださいれば幸いです。

## 第1話

ああ、もう2年になるのか……。

蒸し暑さが増して行く梅雨時、俺はふと思った。2年前、俺は自らの意思で愛して「いた」女性を手酷く振った。今迄女性に対して激怒した経験が全くと言って良い程に無かった俺があれ程迄に怒りを露にする事は、もう無いだろう。その女性の事は今はもう何とも思っていない。例えすれ違ってももう誰が誰だか分からない。正しく路傍の石の如く反応も示さない。

……下らん事を思い出してしまった。昨日会社帰りに無理矢理に飲みにつき合わされたせいか……。そこには何故か見知らぬ女性陣も居て、俺は大層居心地が悪かった。正直、サツサと帰リたかったが友人の手前、愛想笑いだけを浮かべて何とか乗り切った。女性連中はあまり面白くはなさそうだったが、仕方無い。俺はそういう場が苦手なのだ。

周りの友人からすれば、「今時えらく淡泊」なんだそうだ。実際俺は淡泊な男で、見目麗しい女性が歩いていても何ら感動を覚える事はない。連中はそんな俺の様子を見て「まだ40前なのに」だの「損してる」

だの好き勝手に言いやがる。俺にしてみれば、「もう40になる」のだ。少々枯れて来ても不思議では無いだろう。

益体も無い考えを収め、勤めを終えて作業着のままオンボロの原チャリに跨って家路に着く。今日の飯は簡単な物で済ませとくか……。どうせ明日明後日は非番だ。ボロアパートで寝っ転がってネット

でもしていれば良いか……。そんな益体も無い事を考えながらタラタラと原チャリを走らす俺の前に何か妙な光景が広がっていた。何かこう、男と女が争っているようにも見える。……。いや、争っていた。

男は俺より何歳か年下だろう。女にしても俺とそう変わらない風体だ。無理矢理手を引つ張って行こうとする男に懸命に抵抗する女。理由は何にしてもあまり見栄えの良い光景では無い。俺は適当な所に原チャリを止め、メットを脱いだ。取り敢えずこのまま放つて置くのも何か気が引けた。まあ、話せば何とか解つてくれる筈。ボンヤリとそう考えつつ、争っているお二人さんの所に近付いて声をかけた。

「あの〜〜〜」

俺の発した第一声がこれだった。今思い返しても何とも情け無い。しかし効果はあったようだった。二人共「ハッ」として動きを止めた。そして女の顔には束の間の安堵の表情、男の顔には困惑と威嚇の両方の表情が浮かんでいた。

「何だ!？」

結構野太い声をしていたが、そこまで怖い相手でも無さそうだ。

「何かあったんですか……?」

「アンタに関係無えだろう!!コッチの話なんだから!!」

「と言ってもアチラさん困ってるみたいだし、取り敢えず乱暴はやめといった方が良くんじゃないですかね?」

男は女の方を睨み付けた。そんなに怖い顔しなくても良さそうなも

んだが……。男が何か言いたそうな顔をした時、女の方が手を振りほどいた。そしてそのまま走り去って行く。

「……………」

男は途端に落胆したような表情になる。まあ、そういう関係だったって事はすぐに解った。そして何故こんな事態になったのか……。それも察しが付いた。別に良い事したとも思わなかったが、こうなると男の方が哀れに思えて来る。事情は全く知らないのだが。

兎も角も俺は男の方に向き直った。するとやっぱりと言うか何と言うか、お決まりお約束の展開になりつつあった。男はやおら怖い顔をこっちに向けてふてぶてしく言い始めた。

「なあオッサン！何で邪魔したよ、ああ？」

オッサン……。確かにそう呼ばれても不思議では無い年齢ではある。しかしこうもストレートに言われると言葉に出来ない反感が沸き上がって来る。それを抑えつつ俺は普通に受け答えをする。傍から見るとかなり間抜けな情景だったろう……。

「いや女の人困ってたみたいだし、結構乱暴な感じもしたし、アレじゃあ話し合いにならないでしょ？」

「だからってテメエが出て来る事も無えだろうが！」

「でもあのままじゃ多分警察呼ばれたりとか何とか……………」

こう言った瞬間、左の方に重い衝撃が走った。殴られたと思ったら次は腰骨の辺りに重い衝撃。次は蹴って来やがった。結構効いていた様でその場でふら付いていたら、男はなにか2言3事罵声を浴びせ、憤然とその場を去って行った。…………やれやれ、考え無しにトラブルに首突っ込んだのが不味かつたかな…………。

何とも言い様の無い気持ちのまま、止めてあつた原チャリに跨りエンジン掛けを掛けた。そしてノロノロと自分の住むオンボロアパートに降り着き何とも言い様の無い重たい気分のまま俺は自分の部屋に入つて行つた。

## 2話（前書き）

第2話です。

## 2話

荷物を詰め込んだバッグをベッドに放り投げ、俺は自分の部屋の真ん中へ腰を下ろした。疲れと痛みがどつと押し寄せ、暗い気分が更に暗くなる。そのまま惰性で寝転がり、安っぽい天井を見上げると今日の運も間も悪い出来事が思い出したくもないのに思い出される。

(何であんな事しちゃったんだ……)

余計なお節介。要らぬ世話。連れの女は逃げたから良かったようなものの、付き合っていたと思われる男からは殴られ蹴られ……悪い事は何一つしていないと思うが、何とも……やれやれだ。

怒りに任せた行動をとるとほぼ確実に良い方向には行かない。2年前の経験でそれを知ったばかりの身としては、あの男が取った行動に怒りよりも寧ろ呆れと哀れみが残った。しかしそれを考えた所でもう俺には関わりのない事だ。あの女はあれつきりあの男には近付かないだろうし、あの男にしても似たような状況になるだろう。

「犬に噛まれたようなもの……か」

独りごちて暫くすると腹が情けない音を立てた。そういや今日は休憩もとってなかったな……。今日は運ばれてくる部品が多すぎて社員総出で肯定を片付けて何とか終わらせたんだ。明日の非番がこれほど有難いと思つた事もない。冷蔵庫を漁り食事の準備をし、要らぬ出勤命令をごく自然に拒否すべく携帯の電源を切つてベツド脇に放り投げた。あとは2日間の短くも貴重な休暇を楽しもう。

薄汚れた作業着のまま40前の男がキッチンに立つ姿は何とも滑稽で、物寂しいものだ。食事を作る間に、何とかして今日の不幸な出来事を脳細胞から締め出し、明日はどこかに出かけてみようか、何を食べようか、映画でも見てみようか……等と益体もない事を延々と考える。夕食が出来上がる頃には、何とか不幸な気分が7割ほど薄らいでいた。

パソコンの電源を入れ、適当にニュースなんかを見ながら黙々と夕食を済ませた。友人の一人が以前訪ねて来た時は「本当に何も無いよなー」と冗談半分で言っていたが、俺は何も無い方が気楽なのだ。物が無いだの何だのより、そこに自分以外の痕跡がある事が嫌なのだ。

そうしてまったりと言うが無駄な時間を過ごしていると、不意に玄関のベルが鳴った。実に何年ぶりだろうか、俺の部屋のベルが鳴るなんて。まあ大方何かの訪問販売か、実家からの届け物だろう。そう考えると俺は生返事を返しながら玄関へノロノロと進んでいった。

「どちら様で……?」

見事なまでにヤル気の無い問い掛け。……しかし返事が無い。それ迄のぼんやりした感じが吹き飛び、警戒心が前身を支配した。すると幾分の間があり、か細い声が聞こえて来た。どうやら女性のようなのだ。俺はゆっくりとドアを開けた……が開けながら思った。無用心過ぎるだろ……。

そしてドアの外に居た女性を見て俺は軽く驚いた。……  
今日俺が何とは無しに助けてしまった女性だった。

「あれ……アンタは……。」

「・・・・・・・・」

思ったよりも小柄だった。そして俯いているのと、夕闇が迫る中なので顔が良く判らない。ついでに言っていると俺はあんまり目が良くないと云う訳で俺は気怠そうにその女性に問いかけてみた。

「えー・・・と、どちらさんで？何か・・・御用ですかね？」

「さっきは・・・その、ありがとう。」

ああ、礼を言いに来ただけか。・・・でも待てよ、何でこの女俺の部屋知ってたんだ？友人や親や会社の人事課以外、このオンボロ部屋は知らない筈なんだが。

「いえ、俺は何も・・・つか何でこの部屋知ってますか？俺・・・悪いけど女の知り合い殆ど居ないもんで・・・。」

「・・・・・・・・判らない？」

「・・・・・・・・？」

何を言ってたんだこの女・・・。正直危ないヤツかも知れん。俺はイ力れた連中と付き合うつもりも知り合うつもりも見るともりも毛頭無いんだ。礼を言いに来てくれたのは良いがさっさとお帰り願おう。これ以上関わり合って更に変な事に巻き込まれたんじゃ堪ったものではない。

「あー・・・。誰でしたっけ？」

馬鹿か俺は！！何呑気に聞き返してんだよ？と自分を叱り飛ばしている、その女はゆっくりと顔を上げてこつちを真っ直ぐに見据えた。その顔を数秒凝視して、俺の中に何とも言い様の無い感情が持ち上がった。

その顔は、俺がもう二度と見たくない、見て堪るかと思った顔だった。

「晶子……！」

「久しぶり、悠太。」

嘗て俺はこの女を愛した。普通に出会い、普通に恋をしていた筈だった。俺はこの女と一緒に居た時をあの時まで大事にしていた。この女も同じと信じていた……。しかしそれは2年前に脆くも崩れ、俺は再び自分に鎧を被せて生きる様になった。その女が、何故か俺の目の前において、弱々しい微笑みを……。潤んだ瞳をこっちに向けていた。

夕闇が迫り、そして……。空が曇り始めていた。

### 3話

夕闇がゆっくりと迫り来る中で、俺はただ呆然としていた。何でこの女俺の部屋知ってたんだ？何でコイツここに居るんだ？それが最初に思った事だった。懐かしさも何も湧いて来ない。2年も前の存在である筈のこの女を俺は未だ拒み続けているのだ。

「……何でここに来た？」

自分でもこんなに冷たく、色のない言葉と声音が出るとは思わなかった。目の前の女……綿貫晶子は所在無げに俯いたまま、何かを言おうとしている。正直な所それを言う前に突っ撥ねる事も出来たが、何故だか俺はその言葉を待った。

「お礼、言いたくて……昨日、助けてくれたから……。」

そう言つて弱々しく微笑む……その笑顔で、そんな目で俺を見るな。拒んだ筈の、忘れていた筈の光景が浮かびそうになる。それに、俺自身昨日はこいつの顔なんざまともに見ちゃいないんだ。まさかコイツだったとは思わなかった。

「あの時は……そりゃ傍から見てマズイと思つたから、そうしただけで……別に前かどうか、まともに見てないし。」

「私……あの時は逃げ帰っちゃったけど、正直びっくりしたの。貴方が……居るなんて思わなかったから……。」

居ちゃ悪いのかよ……ガキのような言葉が頭の中で回る。それを口に出す代わりに、俺は不機嫌な顔で明後日の方向を向いた。

この状況も、傍から見りゃ結構迷惑な光景なんだろう。．．．勘弁してくれ。

兎も角もこの状況を早々と切り抜けたかった俺は何か体の良い言い訳はないだろうかと血の巡りの悪い頭を働かせた。明日も仕事だから．．．．．だるいし早く寝たいから．．．．．自分でも情けなくなるくらい、良い言葉が浮かばない。

晶子はまた何か俯き加減に顔を伏せた。空は夕闇に染まってもう黒と紺色が入り交じっている。そうこうしていると、何がパラパラと落ちて来た。．．．．．雨だ。雫は段々と落ちて来る速さと強さを増し、終いには結構な降り方になっていた。

ココでコイツを追い返す事も、出来ない訳ではなかった。でも、雨の中に女一人を放り出すのも何となく気が引けた。そう考え終わらない内に、何故か俺の口から言葉が突いて出ていた。

「取り敢えず．．．．．上がれよ。雨、ひどくなって来たし．．．．．」

晶子は一瞬、ほんの一瞬ビクツとしたがやがてゆっくりと頷き、部屋に入って来た。所在無げに立つ背中を見て、俺はドアを閉めた。雨は激しさを増していて、全てを覆い隠すように振り続けている。

4話(前書き)

4話です

## 4話

雨は激しさをどんどん増して行き、地面と屋根を激しく打ち付ける。雨の振り続ける音に混じり、何処か遠くで雷の音がしている。もうすっかり夜と言っても良い状態の中、俺の内面は外の状態よりの冷え込みつつあった。

晶子は俺の対面に座り、ずっと俯いている。俺の反応が恐いのか・・・それともここに来てしまった事を今更に後悔しているのかは解らない。俺は俺で居心地の悪さを少しでもどうにかしたくてキツチンに逃げ込み慣れない茶の準備などをしている。

二人分のコーヒーなど淹れたのは友人の一人が終電を逃して帰れなくなった日以来だ。思い出したくもないがコイツとそれなりの仲であった時も俺は何故かこういう事はしなかった。照れ臭いだのという以前に、その発送すら浮かばなかった。

兎も角も二人分のコーヒーを持って戻った時、アイツは少しだけ顔を上げていた。別に深く観察している訳じゃないんだが、何かを決めたと言う感じはした。正直、嫌な予感しかしない。

コーヒーを一口二口啜った晶子が怯えたように口を開いた。

「あのね・・・悠太。」

俺は口を開かずに只無愛想極まりない視線を晶子に向ける。一瞬怯んだように視線を逸らした晶子だったが、やがて遠慮がちに言葉を口にしました。

「今日……来たのは……ね。お礼言いたかったの、昨日の。」

「別にいいよ。そんな大層な事した訳じゃないから。」

「昨日の男の人から、殴られたんでしょ？」

「誰に聞いた？」

「聞かなくても分かるよ……。顔、少しだけ腫れてきてるから……。」

「……そうか。」

「ありがとう……。ごめんね。それに昨日は私、逃げ帰っちゃって……。」

「そりゃ女があんな事されてりゃ誰だって恐いだろっさ。少し痛い目は……見たけど、そう酷くはない。」

ハッキリ言うと、このままさっさと目の前の女にはお帰り願いたい。こんな天気の良い日に更に不景気な話されたんじゃ夢見が悪くなるのは確実だ。それに、俺はもう二度とお前には会いたくなかった。これからも会うつもりもそんな事も無いと決めて過ごしていたのに、全く、とんだ厄日と落とし穴だ。

何にしても、そろそろ本当の目的を離して欲しい。コイツがここに来たのはそんな話をする為じゃないのはとっくに分かってる。

「お前……ここに俺が住んでるって、誰に聞いた？」

すると晶子はビクッと身を震わせた。ビンゴかよ……。

「まさか俺の友達連中に聞いたんじゃないよな？」

言っつか言っまいかと暫くの間迷っていたが、辛抱強く俺は待っていた。多分俺の考えてる事と、コイツの答えはまるっきり一緒だ。女に甘くてすぐ同情する奴は俺とコイツの知っている限り一人だけだ。

## 5話(前書き)

5話です。更に暗くなりますW

## 5話

やっぱりと言うか、納得と言うか……。この間の悶着までもが仕込みとは言わないが、俺の居場所を教えた人間が居る。恐らくソイツは晶子と俺の過去の経緯を何となく聞いて、それに同情したんだろう。俺と晶子の共通の友人といたらアイツしか居ない。

「俺がココに住んでる事知ってんのはアイツだけだわな……。」

「……………うん……………」

「何処まで話した？」

「え……………？何処までって……………」

「多分俺とお前が……………付き合ってた所まで話したんだろ？……………まあアイツは俺達がどうなったか一応知ってるみたいだから、そこまで驚きはしないけどな。」

晶子はかなり身を固くして黙っている。そりゃそうだ、実際俺は多少の怒りを覚えている。それに俺にとっては親友とも言えるアイツに対してこういう形で迷惑を掛けたと言う所が気に入らない。アイツも今頃多少の罪悪感に苛まれている筈。元々がそういう奴だ。それで大きなトラブルに巻き込まれた事も俺は知っている。後でアイツに対して何かフォローしとかなきゃな。

俺は改めて晶子を見た。元々キツイ目付きらしいので、晶子にとっては睨まれたと感じるかも知れないが、そんな事は知った事ではない。俺は怒りを抑えつつも話しかけた。

「何でこういう時にアイツを頼るんだ？俺の居場所が知りたきゃ、自分で調べりゃ良かったのに。」

「ごめんなさい……………」

「別に謝らなくても良いよ。フォーローは俺がしておくし。でもな、こういう手段を使われるのは本当に嫌いなんだ。お前が知らなかったと言ってもな。第三者を否応無く巻き込むかも知れないんだからさ。」

「俺もいい加減、お前が何を言いたくてここに来たのか解ってるよ。でもな……………」

正直俺は迷っていた。確かにコイツのやった事はルール違反だ。今日この話に関係が無かった筈の人間を巻き込んでしまいかねない晶子の行動は。それに対してハッキリと突っぱねる事も出来る。しかしここでコイツを突き放す事が、本当にいい結果を生むのか？少しはコイツの話聞いても良いんじゃないのか？そういう同情的とも言える気分になっていたのも事実だからだ。

雨の音がさつきと比べて幾分マシになっている。この話が終わればコイツは自分の居場所に帰ってくれるだろうし、これから先もう二度と、本当に遭わずに済む。晶子がここに来て既に1時間が過ぎようとしているが、俺は全くいい気分にはなっていない。この雨のせいも多少はあるだろうが、そうでなくともこの女と再会するのだけは御免だった。俺は少々後ろめたい気分ではあったが、その言葉を口にした。

「俺は……………お前とは遭いたくなかったよ。」

「・・・・・・・・!!」

向こうも分かっていたのだろう。しかし・・・・・・・・やはりショックではあったようだ。俺はもうコイツとは絶対に関わりたくない。俺の方も関わらない。そう決めて今日まで過ごして来た。しかしあの悶着を止めたが為にまたしても関わってしまった。晶子の様子を尻目に俺は更に言葉を紡ぐ。

「お前もお前で色々あったのは分かるよ・・・・・・・・。あんな男に引っかけがちまって暴力まで振るわれて

・・・・・・・・でもさ、だからと言って既に過去の人間である筈の俺を頼るのはどうかと思うよ。職場であれお前の友達の人であれ、他に頼るべき人間はいる筈だ。」

晶子はいつしか涙を流していた。しょうがないと言えばしょうがない・・・・・・・・しかし、俺達は既に別の道を進んでいる。何かしら繋がった所があれば別だったのだろうが、もうその繋がりがりさえもない。今更昔に近い関係を築くのは、もう無理だ。それはお互いに理解している筈だ。

「私・・・・・・・・逢いたかった。貴方に逢いたかった。」

涙声で晶子が告げる。俺はそれが居たたまれなくてまた明後日の方角を向いたままその言葉を聞いた。

「あの時、悪い事したのは・・・・・・・・私。それを謝りたかった。・・・・2年間、ずっと。でも貴方はもう居なくなっていて、どうして良いか分からなかった・・・・・・・・。」

そこから先はもう言葉になっていない。只、押し殺した嗚咽がこの冷たい部屋に広がって澱んでいく。俺は動こうにも動けずに居た。自分が発した言葉が何かとんでもない自体になっているんじゃないと言っ錯覚すら覚える。下手なドラマならここで慰めの一つや二つ言えるんだろうが、生憎と俺はそんな器用でも、出来た人間でもない。自分の淡泊さに嫌気がさす……が、別れを選び、別の道を選んだのは俺の方だ。どうして自分の都合のいい方向に持って行けるだろうか？

雨はまだ降り続ける。激しくもなく優しくもなく、ただこの場面を責めるかの様に。

## 6話(前書き)

6話です。いつも短い、暗いですが今回は更に短いですw

## 6話

もう二度と遭いたくはない。別れてから暫くするとこの決意も薄れて来る……。そんな言葉を聞いた事があった。しかし2年経つても不思議と俺の心に揺らぎは訪れなかった。固く誓ったのは確かなんだが、ここまで俺は頑固な人間だったと言う事に気付いたのもこの時だ。実際に寂しさと言う感情は全くと言って良い程訪れず、唯いつも通りの自分の為に生きる人生が戻って来た。

自分の人生に関して漠然とした不安はいつも付き纏ってはいたものの、およそ恋愛と言うものに関して2年間全く無縁であった。それは俺にとっては幸福であり、同時に人間として何かを自ら放棄した事でもあった。事実晶子の姿を見た時も懐かしさ、嬉しさなどと言ったプラスの感情は全く沸き上がって来る事は無く、ただ言い知れぬ別の不安が押し寄せて来ていた。

晶子はいつ先程、自分の意志でこの部屋を出た。タクシーか何かを呼んでいた様で多少ふらつきながらもそれに乗り込み自宅へと戻って行った。一番の厄介事は去った。しかし何故か俺の中にホッとしたような思いはなかった。いずれまた遭うのではないか？早めに引越しを済ませるべきではないか？と根拠のない危機感が募っていた。

ベッド脇に放ったままの携帯をふと見ると画面がチラチラと瞬いている。メールか着信か……………

いずれにせよまともに相手をする気には到底ならない。恐らく会社から夜勤の要請だろう……。そう思いチェックしてみると、晶子との話の中に出て来た人物からだった。また何か変に勘づいたのか。大げさにため息を付いて俺はそいつに電話をかけ直した。数秒のコール音の後、間延びしたような奴の声が聞こえて来た。

(もしもし)

「ああ俺だ。何だ？」

(ん〜最近どうよって思ってた。)

嘘つけ。最近云々と言う割にはタイミングが良すぎるだろうが。

「そんな話じゃないだろ？」

(あ〜解っちゃうか。綿貫さん……そっちに来たる?)

「ああ来たよ……ついさっき帰ったがな。つか……」

(ゴメン！お前ん家教えたの……俺だ。)

「……そりゃ別に良いけどさ。お前も何かしら聞いてんだろ？」

(まあね……俺が突っ込むべきじゃないとは思ってたんだが……あの有様じゃな……)

やっぱり泣き付いたのだ。話の内容はさて置くにしても、結局それを放って置けなかったコイツこと常盤修司は渋々俺の居場所を教えただ……ハッキリ言うと言った。と言うか、そうとしか言い様が無い。

「まあ、想像はつくよ。でもまあ、決裂したけどな。」

(決裂って……)

「俺としちゃ・・・もう二度と遭いたくない訳よ。恨む気持ちなんざ無いんだが、かと言ってヘラヘラして友達付き合いするのもどうかと思うしな。これで完全に縁が切れたって訳さ。」

(そうか・・・。綿貫さん、落ち込まなきゃいいけど・・・)

「そう言うんならお前が相談役になってやったらどうだ？同情するのは良いけど、そんなんじやお前までコケるハメになるかも知れんぜ？」

ぶつきらぼうに告げると修司は(それも困るよな・・・)とボヤいていた。まあアイツにとっても寝耳に水の出来事であったようだ。良い人過ぎる、優しすぎる、誠実それが修司の長所だが、今回に関しては完全に裏目に働いてしまった。俺は「気にするな」の何のと適当にフォローじみた事を言い、修司もそれなりに言葉を返した。そして「今度飲みにも行こうか」とあやふやな約束を交わして電話を切った。

電話を再び脇に放ると、ド・・・と疲れが押し寄せて来た。もう何もやる気が起きず、ベッドで寝る事も億劫になる有様だった。俺は誰にもなく「何でこうツイて無えんだよ・・・」とか何とかボヤきながら寝転がっていると、いつしか俺の意識は闇に落ちて行った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0624u/>

---

望まぬ再会、望んでいた再会

2011年6月29日23時47分発行